

漢法苞徳塾資料	No. 307
区分	資料・病症
タイトル	柳宝詒・論伏邪外発須辨六経形証 『温病正宗』（清・王徳宣）の第二章，二十三より
著者	八木素萌
作成日	1995.02.05

◎訓読

◇『傷寒緒論』曰：〈『傷寒緒論』ニ曰ク〉

1. 初発病時、頭項痛、腰脊強、悪寒、足太陽也。
〈初メ病ヲ発コス〈または発スル〉ノ時、頭項痛ミ、腰脊強バリ、悪寒スルハ、足ノ太陽ナリ。〉
2. 発熱面赤、悪風、手太陽也。
〈発熱シ、面赤クシテ、悪風スルハ、手ノ太陽ナリ。〉
3. 目疼鼻乾、不得臥、足陽明也。
〈目疼ク鼻乾キ、臥スコト得ザルモノハ、足ノ陽明ナリ。〉
4. 蒸熱而渴、手陽明也。
〈蒸熱シテ渴カクハ、手ノ陽明ナリ。〉
5. 胸脇満痛、口苦、足少陽也。
〈胸脇、満痛シテ、口苦キハ、足ノ少陽ナリ。〉
6. 耳聾及寒熱往来、手少陽也。
〈耳聾シ及ビ寒熱往来ヲ病ムモノハ、手ノ少陽ナリ。〉
7. 腹満自利而吐、足太陰也。
〈腹満シ自利シテ吐スハ、足ノ太陰ナリ。〉
8. 口乾津不到咽、手太陰也。
〈口乾イテ津咽ニ到ラザルハ、手ノ太陰ナリ。〉
9. 脈沈細、口燥渴、足少陰也。
〈脈沈細ニ、口燥渴スルハ、足ノ少陰ナリ。〉

10. 舌乾、不得臥、手少陰也。
 〈舌乾イテ臥スコト得ザルモノハ、手ノ少陰ナリ。〉
11. 耳聾囊縮、不知人事、足厥陰也。
 〈耳聾シ囊縮マッテ人事ヲ知ザルハ、足ノ厥陰ナリ。〉
12. 煩満厥逆、手厥陰也。:
 〈煩満シ厥逆スルハ、手ノ厥陰ナリ。〉

◇『医略』曰：〈『医略』ニ曰ク〉

13. 太陽之脈、上連風府、循腰脊、故頭項痛、腰脊強。
 〈太陽ノ脈ハ、上ッテ風府ニ連ナリ、腰脊ヲ循グル、故ニ頭項痛ク、腰脊強バル。〉
14. 陽明之脈、挾鼻絡于目、故身熱目疼、鼻乾、不得臥。
 〈陽明ノ脈ハ、鼻ヲ挾ンデ目ニ絡ウ、故ニ身熱シテ目疼ク、鼻乾イテ、臥スコトヲ得ズ。〉
15. 少陽之脈、循脇絡于耳、故胸脇痛而耳聾。
 〈少陽ノ脈ハ、脇ヲ循リ耳ニ絡ウ、故ニ胸脇痛クシテ耳聾ス。〉
16. 太陰脈布胃中、絡于噤、故腹満而噤乾。
 〈太陰ノ脈ハ、胃中ニ布リ、噤ニ絡ウ、故ニ腹満シテ・噤乾ク。〉
17. 少陰脈貫腎、絡于肺、繫舌本、故口燥舌乾而渴。
 〈少陰ノ脈ハ腎ヲ貫イテ、肺ニ絡イ、舌本ニ繫ル、故ニ口燥シ舌乾イテ渴ス。〉
18. 厥陰脈循陰器、而絡于肝、故煩満而囊縮。
 〈厥陰ノ脈ハ陰器ヲ循ッテ、肝ニ絡ウ、故ニ煩満シテ囊縮ス〉
19. 凡外感病、無論暴感伏氣、
 〈凡テ外感ノ病ハ、暴感ト伏氣ト、〉
20. 或由外而入内、即由三陽而伝入三陰。
 〈或ハ外由リ内ニ入ルモノトヲ論ズコト無ク、三陽由リシテ三陰ニ伝入ス。〉
21. 或由内而達外、則由三陰而外出三陽。
 〈或ハ内由リ外ニ達スルモノハ、則ワチ三陰ヨリシテ外ニ三陽ニ出ズルナリ。〉

22. 六経各有見証、即各有界限可馮。
 〈六経ニ各見ルル証ノ有リトハ、即チ各ニ界限有ルニ馮レリ。〉
23. 治病者、指其見証、即可知其病之浅深。
 〈治病ノ者ハ、其ノ見証ヲ指シテ、即チ其病ノ浅ト深ヲ知ルコトヲ可ナリ。〉
24. 問其前見何証、今見何証、即可知病之伝変。
 〈其ノ前ニハ何レノ証見ワレ、今ハ何証ノ見ワレタルカヲ問ウテ、即チ病ノ伝変ヲ知ルコトヲ可ナリ。〉
25. 傷寒如此、温病何独不然？
 〈傷寒此ノ如キニ、温病何ゾ独リ然ラザランヤ？〉
26. 『素問；熱病篇』、仲景『傷寒論』、均以此立法。
 〈『素問、熱病篇』ト、仲景ガ『傷寒論』トハ、均シク此レヲ以ッテ法ヲ立テリ。〉
27. 聖人復起、莫此易也。
 〈聖人復ビ起ツトモ、此ヲ易ルコト莫キナリ。〉
28. 近賢葉氏、始有傷寒分六経、温病分三焦之論、謂出河間。
 〈近賢ガ葉氏、始メテ傷寒ヲ六経ニ分チ温病ヲ三焦ニ分ツノ論アリ、謂イテ河間ニ出ヅト。〉
29. 其实温熱病之法、至河間始詳。
 〈其レ実ニハ温熱病ノ法ハ河間ニ至リテ始メテ詳シ。〉
30. 至分三焦之論、河間并無此說、其書具在、可覆按也。
 〈温病ヲ三焦ニ分ツノ論ニ至ッテ河間ニハ并セテ此ノ說無シ、其ノ書ハ具ワリテ在レバ覆ネテ按ズベシ。〉
31. 厥后吳鞠通著『温病条辨』、遂專主三焦、廢六経而不論。
 〈厥ノ后吳鞠通『温病條辨』ヲ著ワシ、遂ニ專ラ三焦ヲ主ニシテ、六経ヲ廢シテ論ゼズ。〉
32. 殊不知人身経絡、有内外浅深之別、而不欲使上下之截然不通也。
 〈殊ニ人身ノ経絡、内外浅深ノ別アルヲ知ラズ、而モ上下ノ截然トシテ通ゼザラシムルヲ欲セザルナリ。〉

33. 其上焦篇提綱云：凡温病者、始于上焦、在手太陰。
 〈其ノ上焦篇ノ提綱ニ云ウ：凡ソ温病ハ上焦ヨリ始マツテ手ノ太陰ニ在リト。〉
34. 試觀温邪初発者、其果悉見上焦肺経之見証乎？
 〈試ミニ温邪ノ初発ノ者ヲ觀レバ、其レ果シテ悉ク上焦ノ肺経ノ見証ニ見ルルヤ、〉
35. 即或見上焦之証。其果中下焦能絲毫無病乎？
 〈即ワチ或イハ上焦ノ証見ワレ、其ノ果ニ中下焦ニハ能ク絲毫モ病無キカ。〉
36. 鞠通苟虚心診視、応亦自知其説之不可通矣。
 〈鞠通苟モ虚心ニ診視スレバ、応ズルモノハマタ自ラ其ノ説ノ通ズベカラザルヲ知ラン。〉
37. 况傷寒温熱為病不同、而六経之見証則同、用藥不同、而六経之立法則同、治温病者、烏可舍六経而不講者哉？
 〈況ンヤ傷寒ト温熱ノ病ヲ為スモノ同ジカラズ、而シテ六経ノ見証ナレバ則ワチ同ジ、用藥ハ同ジカラズ、而シテ六経ノ立法ナレバ則ワチ同ジ、温病ヲ治スル者ノ、烏ソゾ六経ニ舍シテ講ゼザル可キ者カナ？〉

◎譯

『傷寒緒論』に述べている。

『医略』には、

未完